

階乗級数とその応用

京大 数研 河野實彦

1. 微分方程式系

階乗級数の応用例として、常微分方程式や差分方程式の解の、階乗級数による展開がある。特に、差分方程式においては、常微分方程式における巾級数と同じ役割を、解の行動を調べるのに用いられて来た。常微分方程式においては、解の行動を調べるには、巾級数が多く用いられ、例えば、不確定特異点近傍の解の行動の研究においては、有限巾級数による解の漸近的表示の研究が、主であった。これは、不確定特異点近傍においては、一般に、解の存在は言えても、確定特異点近傍の解と同じように、収束する巾級数によって、解を展開する事が出来なからである。ところが、階乗級数を用いれば、不確定特異点近傍の解も、展開表示する事が出来る。この事を簡単な微分方程式系を用いて、説明する。

次の、原点に確定特異点、無限大に、rank 1 の不確定特異点を持つ、微分方程式系を考える。

$$(1) \quad \frac{dX}{dt} = \left( B + \frac{A}{t} \right) X$$

ここで、 $A, B$  は  $n \times n$ -行列で、 $B$  は特に

$$B = \begin{pmatrix} \lambda_1 & & 0 \\ & \lambda_2 & \\ 0 & & \ddots \\ & & & \lambda_n \end{pmatrix}$$

で、 $\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_n$  は、0 でない相異なる数と考える。

この微分方程式系は、不確定特異点近傍で、次の形式解を持つ。

$$(2) \quad X^k(t) \simeq e^{\lambda_k t} t^{a_{kk}} \sum_{s=0}^{\infty} H^k(s) t^{-s}$$

いま、 $X^k(t) = e^{\lambda_k t} Y^k(t)$  とおくと、微分方程式系(1)は

$$(3) \quad \frac{dY^k}{dt} = \left( B - \lambda_k I + \frac{A}{t} \right) Y^k$$

となり、 $Y^k(t) = t^{a_{kk}} \sum_{s=0}^{\infty} H^k(s) t^{-s}$  を代入してみると、係数  $H^k(s)$  は

$$(4) \quad \begin{cases} (a_{kk} - s - A) H^k(s) = (B - \lambda_k) H^k(s+1) \\ (B - \lambda_k) H^k(0) = 0 \end{cases}$$

を満足す。

更に,  $Y^k(t) = t^{-q} Z^k(t)$  の変換により, 微分方程式系 (3) は

$$(5) \quad \frac{dZ^k}{dt} = \left( B - \lambda_k I + \frac{A + qI}{t} \right) Z^k$$

と変換されるので,  $A$  の対角要素  $a_{kk}$  の実部は任意の正または負の値と考えることもできる。

## 2. Laplace 変換

さて, 微分方程式系 (3) を満たす様な, Laplace 積分

$$(6) \quad Y^k(t) = \int_0^{\infty} W^k(x) e^{-tx} dx$$

を考える。積分路として,  $x=0$  から, 無限大にのびる直線  $\arg x = \omega$  を選ぶ, この上には  $\lambda_j - \lambda_k (j+k)$  の点を含まないようにする。

この直線に沿って,  $x$  が無限大に行くと

$$(7) \quad \lim_{x \rightarrow \infty} e^{-tx} \int_0^x W^k(x) dx = 0$$

なる仮定の下に, Laplace 積分 (6) を, 微分方程式系 (3) に代入する事によつて,  $W^k(x)$  は下の積分方程式を満たさなければならぬ。

$$(8) \quad (x + B - \lambda_k) W^k(x) = -A \int_0^x W^k(x) dx$$

この両辺を微分すれば

$$(9) \quad (x + B - \lambda_k) \frac{dW^k}{dx} = (-A - I) W^k$$

を得る。

と置く。 Laplace 積分  $\Upsilon^k(t)$  として、漸近級数

$$(10) \quad \Upsilon^k(t) \cong \sum_{s=0}^{\infty} H^k(s) t^{-s+a_{kk}}$$

を得るものとする。  $W^k(x)$  としては、次の Borel 函数  
とすればよい。

$$(11) \quad W^k(x) = \sum_{s=0}^{\infty} \frac{\Gamma(-a_{kk}) H^k(s)}{\Gamma(s-a_{kk})} x^{s-a_{kk}-1}$$

実際、この函数は微分方程式系(9)を形式的に満足して

いる。

$$\begin{aligned} & x \frac{dW^k}{dx} + (B - \lambda_k) \frac{dW^k}{dx} + (A + I) W^k \\ &= \Gamma(-a_{kk}) \left\{ \sum_{s=0}^{\infty} \frac{H^k(s)}{\Gamma(s-a_{kk})} x^{s-a_{kk}-1} + (B - \lambda_k) \sum_{s=0}^{\infty} \frac{H^k(s)}{\Gamma(s-a_{kk}-1)} x^{s-a_{kk}-1} \right. \\ & \quad \left. + (A + I) \sum_{s=0}^{\infty} \frac{H^k(s)}{\Gamma(s-a_{kk})} x^{s-a_{kk}-1} \right\} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 &= \Gamma(-a_{kk}) \sum_{s=0}^{\infty} \left[ \frac{(s - a_{kk} + A) H^k(s) + (B - \lambda_k) H^k(s+1)}{\Gamma(s - a_{kk})} \right] \lambda^{s - a_{kk} - 1} \\
 &= 0
 \end{aligned}$$

と  $\epsilon > 0$  が、形式解の係数  $H^k(s)$  を差分式 (4) を使って評価すれば、

$$(12) \quad \|H^k(s)\| \leq \frac{\|H^k(0)\|}{|\lambda - \lambda_k|^s} \frac{\Gamma(s + \|A\| + |a_{kk}|)}{\Gamma(\|A\| + |a_{kk}|)}$$

となるので、 $W^k(x)$  の右辺は、 $|x| \leq |\lambda - \lambda_k| = \min_{j+k} |\lambda_j - \lambda_k| > 0$  だと収束する事がわかる。よって、 $W^k(x)$  は、微分方程式系 (9) の、原点 (確定特異点) 近傍の  $x \rightarrow 0$  の特殊解である。

さて、ここで  $W^k(x)$  が exponential type 函数である事を示そう。即ち、 $C$  は充分大きい正の数とし、 $\epsilon (> 1)$  は  $\omega$  に関係して決まる正の数とすれば、

$$(13) \quad |W^k(x)| < C e^{\epsilon |x|}$$

が成立する。実際、積分方程式 (8) を componentwise に書いて

$$(14) \quad (x + \lambda_i - \lambda_k) W_i^k(x) = - \sum_{j=1}^n a_{ij} \int_0^x W_j^k(x) dx$$

ある扇形領域  $S$  の,  $|x| \leq R$  なる部分では,  $|w_i^k(x)| < C e^{k|x|}$  が成立すが,  $|x| > R$  で, ある  $\omega'$  に対しても上の不等式が成立しないと仮定する。この時の  $|x|$  の下界を  $R'$  とすると,  $i=i'$ ,  $\omega = \omega'$  において  $|w_{i'}^k(x)| = C e^{k|x|}$  となる。

一方,  $|x| \leq R'$  において  $|w_j^k(x)| \leq C e^{k|x|}$  であるので, 上式 (14) より,  $|x| = R'$ ,  $i=i'$ ,  $\omega = \omega'$  に対して

$$\begin{aligned} |x + \lambda_i - \lambda_k| |w_i^k(x)| &\leq \sum_{j=1}^n |a_{ij}| \int_0^{|x|} |w_j^k(x)| dx \\ &\leq \|A\| \int_0^{|x|} C e^{k|x|} dx \\ &\leq \frac{\|A\|}{h} C e^{k|x|} \end{aligned}$$

$$|w_{i'}^k(x)| = C e^{k|x|} \leq \frac{\|A\| C e^{k|x|}}{|x + \lambda_i - \lambda_k| h}$$

$$1 \leq \frac{\|A\|}{|x + \lambda_i - \lambda_k| h}$$

最後の式の右辺は  $x \rightarrow \infty$  のとき 0 に収束し,  $R$  を充分大きい値とすれば 1 より小さくなり, 矛盾する。よって,  $w_{i'}^k(x)$ , 即ち  $w^k(x)$  は exponential type 函数である事がわかった。この事より, 次の定理が成立す。

定理 Laplace 積分 (6) は 半平面  $\operatorname{Re}(te^{i\omega}) > \alpha$  に  
おいて 微分方程式系 (3) の解を表わす。

### 3. 階乗級数展開

Laplace 積分 (6) の階乗級数展開について説明しよう。

そのために、先づ、変数変換  $\lambda = -\frac{1}{x} \log z$ ,  $z = e^{-x\lambda}$  を  
行なう。  $z = e^{-x\lambda}$ ,  $\lambda = \gamma e^{-i\omega}$  として、絶対値  $\gamma$  は適当に大き  
くとる。 即ち、 $z$ -平面上の円  $|z-1| = 1$  の内部は、  
 $x$ -平面上のある領域  $G$  に移され、 $\gamma$  を大きくすれば、  
領域  $G$  は半直線  $\arg \lambda = \omega$  の近くの狭い扇形領域  $S$  の  
中に入るよりに出来て、内部と境界上には、特異点  $\lambda_1 - \lambda_n$  ( $n=0$ )  
を含まない様になる事が出来る。

その時、

$$(15) \quad V^k(z) = W^k\left(-\frac{1}{x} \log z\right) = \sum_{m=0}^{\infty} B^k(m) (1-z)^{m-\alpha_{km}-1}$$

は、 $|z-1| < 1$  として収束し、円周上での特異性は  $\lambda = \infty$  に対  
応する  $z=0$  のみである。  $\omega = 3\pi$  とする。

$$|z-1| = \frac{1}{\gamma} |\log z| < -\frac{1}{\gamma} \log |z| (1+\varepsilon)$$

より、 $z=0$  における  $V^k(z)$  の特異性 (Hadamard の order)

は、 $W^k(\lambda)$  に対する評価式 (13) より、

$$(16) \quad |V^k(z)| < C e^{-\frac{h}{\gamma} \log_2 |z| (1+\varepsilon)} = C |z|^{-\frac{h}{\gamma} (1+\varepsilon)}$$

を得る。この事は、 $V^k(z)$  の円周  $|z-1|=1$  上での order が、高々  $\frac{h}{\gamma}$  以下である事を示し、充分大なる  $m$  に対し

$$(17) \quad |B^k(m)| < m^{\frac{h}{\gamma} - 1 + \varepsilon}$$

が成立する。

さて、ここで、次の級数が収束する事を示そう。

$$\begin{aligned} & \sum_{m=0}^{\infty} |B^k(m)| \int_0^1 |(1-z)^{m-a_{kk}-1} z^{\frac{1}{\gamma}-1}| dz \\ &= \sum_{m=0}^{\infty} |B^k(m)| \int_0^1 (1-z)^{-\operatorname{Re}(a_{kk})+m-1} z^{\operatorname{Re}(\frac{1}{\gamma})-1} dz \\ &= \Gamma(\operatorname{Re}(\frac{1}{\gamma})) \sum_{m=0}^{\infty} |B^k(m)| \frac{\Gamma(m - \operatorname{Re}(a_{kk}))}{\Gamma(\operatorname{Re}(\frac{1}{\gamma}) + m - \operatorname{Re}(a_{kk}))} \end{aligned}$$

と示す。充分大なる  $m$  に対し

$$\begin{aligned} |B^k(m)| \left| \frac{\Gamma(m - \operatorname{Re}(a_{kk}))}{\Gamma(m + \operatorname{Re}(\frac{1}{\gamma}) - \operatorname{Re}(a_{kk}))} \right| &< m^{\frac{h}{\gamma} - 1 + \varepsilon - \operatorname{Re}(\frac{1}{\gamma})} \\ &= m^{-\frac{1}{\gamma} (\operatorname{Re}(te^{i\omega}) - h) - 1 + \varepsilon} \end{aligned}$$

となり、 $\operatorname{Re}(te^{i\omega}) > h + 2\varepsilon\gamma$ 、即ち、 $\varepsilon$  は任意の小さい数であるならば、 $\operatorname{Re}(te^{i\omega}) > h$  に対し、上の級数は収束する事

がわかった。この事実から、巾級数 (15) を Laplace 積分 (6) に代入して、項別積分が出来る事が許される。

$$\begin{aligned}
 (18) \quad Y^k(t) &= \frac{1}{X} \int_0^1 \sum_{m=0}^{\infty} B^k(m) (1-z)^{m-a_{kk}-1} z^{\frac{t}{X}-1} dz \\
 &= \frac{1}{X} \sum_{m=0}^{\infty} B^k(m) \int_0^1 (1-z)^{m-a_{kk}-1} z^{\frac{t}{X}-1} dz \\
 &= \frac{1}{X} \sum_{m=0}^{\infty} B^k(m) \frac{\Gamma(m-a_{kk}) \Gamma(\frac{t}{X})}{\Gamma(\frac{t}{X}+m-a_{kk})} \\
 &= \frac{1}{X} \frac{\Gamma(\frac{t}{X}) \Gamma(-a_{kk})}{\Gamma(\frac{t}{X}-a_{kk})} \sum_{m=0}^{\infty} B^k(m) \frac{(m-1-a_{kk})(m-2-a_{kk}) \dots (-a_{kk})}{(\frac{t}{X}+m-1-a_{kk}) \dots (\frac{t}{X}-a_{kk})}
 \end{aligned}$$

この右辺は、半平面  $\operatorname{Re}(te^{i\theta}) > h$  で絶対収束する。

#### 4. ニュートン級数展開

もう一つの級数展開と、先の階乗級数展開との関連について述べておこう。いま、 $s > \frac{h}{\sigma} - 1$  なる数  $\sigma$  を選んで、Laplace 積分 (6) を次の形に書き直す。

$$(19) \quad Y^k(t) = \frac{1}{X} \int_0^1 U^k(z) z^s z^{\frac{t}{X}-s-1} dz$$

$|1-z| < 1$  に對して

$$z^{\frac{t}{X}-s-1} = (1-(1-z))^{\frac{t}{X}-s-1} = \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n \binom{\frac{t}{X}-s-1}{n} (1-z)^n$$

が成立つから、これを上に代入して、形式的に項別積分すれば、

$$(20) \quad Y^k(x) = \sum_{n=0}^{\infty} C^k(n) \binom{\frac{x}{\lambda} - s - 1}{n}$$

$$(21) \quad C^k(n) = \frac{(-1)^n}{\lambda^n} \int_0^1 V^k(z) z^s (1-z)^n dz$$

を得る。ここで、項別積分の正当性と、ニュートン級数(20)の収束性の証明には、評価式(16)を使つて、

$$\begin{aligned} |C^k(n)| &< \frac{C}{\gamma} \int_0^1 z^{s - \frac{k}{\gamma} - \delta} (1-z)^n dz \quad (\delta = \frac{k}{\gamma} \varepsilon) \\ &= \frac{C}{\gamma} \frac{\Gamma(s+1 - \frac{k}{\gamma} - \delta) \Gamma(n+1)}{\Gamma(s+n+2 - \frac{k}{\gamma} - \delta)} \end{aligned}$$

$$\binom{\frac{x}{\lambda} - s - 1}{n} = \frac{(\frac{x}{\lambda} - s - 1) \dots (\frac{x}{\lambda} - s - n)}{n!} = (-1)^n \frac{\Gamma(n - \frac{x}{\lambda} + s + 1)}{\Gamma(s+1 - \frac{x}{\lambda}) \Gamma(n+1)}$$

$(\frac{x}{\lambda} - s - 1) \neq \text{non negative integer}$  と仮定すれば、

$$\left| C^k(n) \binom{\frac{x}{\lambda} - s - 1}{n} \right| < \frac{C}{\gamma} \left| \frac{\Gamma(s+1 - \frac{k}{\gamma} - \delta)}{\Gamma(s+1 - \frac{x}{\lambda})} \right| n^{-\text{Re}(\frac{x}{\lambda}) + \frac{k}{\gamma} - 1 + \delta}$$

より、半平面  $\text{Re}(te^{i\omega}) > k$  上、ニュートン級数(20)は収束する事がわかる。

同柱の考え方で、関係式(21)に  $V^k(z)$  の巾級数(15)を代入し、項別積分すれば、二重トン級数の係数  $C^k(n)$  と階乗級数の係数  $B^k(m)$  の間に次の様な関係式が成立する。

$$C^k(n) = \frac{(-1)^n}{\lambda} \int_0^1 \sum_{m=0}^{\infty} B^k(m) (1-z)^{n-a_{kk}-1} z^s (1-z)^m dz$$

$$= \frac{(-1)^n}{\lambda} \sum_{m=0}^{\infty} B^k(m) \int_0^1 z^s (1-z)^{m+n-a_{kk}-1} dz$$

$$= \frac{(-1)^n}{\lambda} \sum_{m=0}^{\infty} B^k(m) \frac{\Gamma(s+1) \Gamma(m+n-a_{kk})}{\Gamma(m+n+s+1-a_{kk})}$$

